

## Inquires in detail newly about the Text non-opened to the public of Shinobu- Orikuchi

Hiroaki MATSUMOTO

An analysis and decipherment announcement of it is made about Shinobu- Orikuchi's text of works and letters non-opened to the public. One is the letter addressed to Hisao Yamashita who lives in Tono, another is the critical manuscript presented to Kiyomonn Yasuda and Masatoshi Ikeda's work, "The translation of the Kokin wakashu that ware made to contrast the text and a translation".

研究報告

折口信夫資料細見(一)

松本 博明\*

一、雪高き閉伊の遠野の物語せよ

「雪高き閉伊の遠野の物語せよ」と題する冊子が遠野市立博物館から発行されている。

師折口の命に従って、故郷石川県大聖寺町を後にして岩手県遠野に移り住み、

佐々木喜善研究、日本民俗学史研究に先駆的な役割を果たした山下久男の、特に民俗

学史的な業績を、本冊、補遺、書誌の三部にまとめたものである。<sup>(1)</sup>

柳田、折口の陰に隠れて、いわばその将兵のごとく動いて、日本民俗学の発展を土台から支えた多くの研究者、採訪者を再評価する試みは、北野博美、早川孝太郎等を取り上げた論文が次第に増えてきたことなどといえ、民俗学史研究の重要な流れとなってきたようだ。

そうしたなかで、折口によっていわば佐々木喜善の後継者として、遠野に送り込まれた格好の、山下久男についても、この冊子によって、その業績、書誌情報が整理された形で世に出たことは、意義あることである。

折口古代研究所が所蔵する折口宛て書簡の中に、以下のような山下久男発信の書簡が現存する。書簡資料のうち、昭和十一年から二十年にかけての資料の多くが散逸しているため、ちょうど山下が折口の勧めで遠野に赴き、遠野を離れるまでの約十年にわたる師弟の往信の様子を窺う資料は、残念ながら残されていない。

古代研究所に現存する山下久男の書簡資料は以下の十一点である。

① 昭和三年八月二十四日(葉書) 天孫降臨の際より御使用ありし井(天真名井)とキャプションが入った絵葉書) 宮崎高千穂消印 旅先から

② 昭和五年一月(名刺) 賀状

- ③ 昭和五年十月三日(封書) 石川大聖寺消印 帰郷の報告
- ④ 昭和六年一月一日(葉書) 同 賀状
- ⑤ 昭和六年四月三日(封書) 同 原稿在中と書かれた封書のみ現存
- ⑥ 昭和六年七月二十三日(葉書) 石川輪島消印 旅先から
- ⑦ 昭和七年一月一日(葉書) 石川大聖寺消印 賀状
- ⑧ 昭和八年一月一日(葉書) 同 賀状
- ⑨ 昭和八年八月三日(葉書) 同 暑中見舞い
- ⑩ 昭和十年九月七日(封書) 同 帰郷報告、上京御礼
- ⑪ 昭和十二年一月一日(葉書) 金沢消印 賀状

①は、旅の途次、宮崎県高千穂から出されたもの。文面によると、この夏一人で四国東南を歩いた後松山へ出、そこから別府へわたり、由布、久重、阿蘇をめぐって宮崎に至った旨書かれて居る。

②は、おそらく正月の挨拶に師の留守宅を訪ねた際に置いていったもの。自筆の名刺右上がり骨格のしっかりした字体で書かれて居る。

③は、慶応義塾大学を卒業したのち、折りからの就職難でしばらく折口の研究室で勉強を続けるも、結局志を得ず石川県大聖寺に帰郷することになったとき、帰郷後すぐに師に宛てて出された書簡である。帰郷直前、九月二十八日に大井出石の折口宅を訪れた際の様子を、山下みずから次のように書いている。

九月二十八日、出石のお宅にあがった。私は「田舎に帰ろうかと思えます、明日の夜」と申し上げると、先生は何ともいえないぬかなしげな表情をされた。それを見て私はうつつむいた。先生は「帰ったら落ちついて居なさいよ、目立ちますからね」と諭された。その時手渡された短冊には、「さくらばなちりぢりにしもわかれゆく、遠きひとりと君もなりなむ」と書かれてあった。私は帰郷後の

ことを考え、記念の意もこめて、小川書店から炉辺叢書三十三巻を買った。<sup>(2)</sup>

山下が渡された短冊は、卒業してそれぞれの故郷へと帰って行く教え子に、例え遠く離れ離れになっても、自分の目は絶えずおまえたちに届いているぞ、という意味を込めて、しばしば送った歌であった。そしてそのころは、この十年後、遠野へ行け、という勧めに込められる。

④、⑦、⑧、⑪はいずれも賀状、また⑨は暑中見舞いの葉書である。

⑤は、「原稿在中」と書かれた封筒のみが残されている。これに入っていたのはおそらく、この封筒の消印から二ヶ月後に発行された『民俗学』第三巻第六号に掲載された「手毬唄——加賀江沼群南郷町——」の原稿であったと思われる。昭和五年に発足した民俗学会は、柳田の参加を得ぬまま折口が代表のような形になっていた。『民俗学』の編集にも折口が深く関わっていたことが、現存する他の教え子たちからの書簡などに窺える。

⑥は、能登半島を友人と探訪して歩いた際、その様子を報告したもの。飯田町（現珠洲市飯田）で友人と合流し、夏祭（珠洲春日神社の納涼祭か）をそこで見たのち、三崎、須々神社を見て、海岸沿いを輪島まで歩いたことが記されている。

⑩は、小川書店から出版したばかりの『加賀江沼郡昔話集』を手に、折から日本青年館で開催された第一回民俗学講習会に参加したあと、ふたたび故郷に戻った帰郷報告として出されたもの。東京で本を贈呈された折口は、早速柳田にも紹介している。文面には、そうした心遣いを見せた師に対する深い感謝の思いが満ち溢れている。

この昔話集に折口は「山下君に寄せる手紙」と題する序文を寄せている。

佐々木喜善さんの採訪録を、

そのまゝ思はせるのは、すべてにおいて、かの遠野の故人

と似た所を持っているからで

はなかるうか。(3)

と書く折口の心には、既に佐々木喜善と山下とが、重ね合わされていただろう。数年後の遠野行きの下地は、既にここにおいて出来上がっていたのである。

## 二、書簡に遺された原稿

折口信夫書簡を整理する過程で、書簡資料の中から折口信夫の未発表と思われる原稿を見出した。昭和五年七月十五日消印の池田正俊からの書簡に同封されていたもので、加筆原稿で二百字詰め十三枚。

池田正俊は、大正八年國學院大學高等師範部国漢科卒、前年十月に安田喜代門と

の共著『口訳対照古今和歌集』を中興館から出版している。(4)

本原稿は、池田の書簡の内容によれば、『口訳対照古今和歌集』に対する批評を依頼された折口が、口述筆記させたものを池田に託して、不適切な箇所は削除、訂正するようにと指示したもののようである。数日後、その口述筆記原稿の内容を池田が一部訂正し、再度折口の許可を得るために郵送したものらしいのである。

原稿がそのまま残っている所を見ると、活字にはならなかった可能性が高いが、調査が必要であろう。

以下、その内容をすべて翻刻紹介する。池田が削ったと思われる部分についても、元に復して再現してある（傍線部）。また、口述筆記のせい、欠字がある。その部分は□をもって示してある。

なお、批評の対象となった『口訳対照古今和歌集』は、「謹呈 折口学兄 安田喜代門」と筆による献呈署名が入った本が、折口古代研究所折口文庫に保存されている。

昭和年代に誇つてよい古今集

——安田・池田両氏の古今集

折口信夫

知つてくれない人は、為方がない。多少でもあゝ折口か、とお見知りごしの方なら私の身びいきしない事を、呑み込んでみて下されると思ふから、安心して、此喜びに充ちて書けさうな紹介文を綴る。

後期王朝文学を研究する人は、大きなものでは、まづ源氏物語。此が本書である。他は旁書として、この次に措いてよいといふ事は、研究室に出入りする若い衆などに、言ひきかせてある。処が都合のよい事には、短い物にも、本書がある。伊勢物語と、古今集とである。此二つ乍ら、注釈書がうんと出てゐて、気早い学者には、もう此上の研究など積む必要はない。此から概念時代だ、など考へられてゐる。けれどもなかなかどうして、一々当って見ると、概念をする基礎に、個々の知識に徹底せぬ処があるのだ。伊勢は、書物の発生成立に於て、古今は、修飾上の類型において、長い昔が含まれてゐる事において、古今自身や、同時代の用語例ではおす事の出来ぬものが多い事を見出す。其を、事ともしない人が多いのは、ある点までわかれば、よいといふ啓蒙学者が、未に多いからな事を示す。

此本の作者両氏は、私よりは、年の稍若い、而も畏友である。お互に、本文検査の便宜に与りにくい学校を出て、更にもっと都合のわるい土地に住んでゐるといふ事が、もし作者らの悲しみになつて居たら、それだけは、頭からどりのけて頂きたい。さうした方法の外に、別に同等の価値ある為事が、われわれの為に、遺されて居たのだといふ事を考へて、氣丈夫になつて貰ふことである。其で此古今集は、其をも忽にしまつたけれども、もつと外に大事に、流布本主義——久しい間の学問の根柢を作つて来た——をおしとほして、どこまで正しいものを得、どこから止むを得ず異本を利用すべきかと言ふ正しい努力が、私は認めてゐることである。此本の私の心を打つた、よい多くの特徴の中、僅かばかりを挙げると、作者別に歌を配列した事、而して、古今以前の統万葉集の形を髣髴せしめた事、従つて作者個々の才能や境遇を、出来るだけ明らかに思はせる企てをした事、此は和歌伝統の第一書たる古今集には、容易に行はれなかつた事で、畏友土岐善麿さんが「万葉以後」で試みた処を、もつと大胆にしてくだされた、という喜びを感じます。

第二は、金子元臣さん畢生の名著とも言ふべき古今集評釈まで続いて来た、歌集抄物の範疇をすつかり蹴越して、様式と、解説との上に、新しい苦勞をつまえた点です。我人ともに囚はれやすい遠鏡式を、一気に脱した処は、殊に嬉しいのです。従つて新し過ぎ、又脱却に苦しんだ痕もあります。此点で、安田さんも、いまま少し助力してくれたらどうかと思つた点がありました。だが、巻二十をまつ先に据ゑ、更によみ人知らずを次にした処は、何と申しても、此本の作者が、歌の神髄を解してゐる事を見せてゐます。

巻二十は、赤彦以前にも喜んだ人はありますが、アラ、ギの筋から申せば、をこがまし乍ら、私が随分讀へました。此は、服部躬治先生の影響かも知れませんが、ひよつとすると、我々仲間の岩橋(小弥太)・武田(祐吉)等の発見かも知れませぬ。今は、ちよつと誤りません。「よみ人知らず」を褒めたのは、正岡子規が、まづはじめだと思ひます。此は、歴史背景と、詞書きの承認と、作者の主観とを認めるといふ、評論家としての進んだ境地が出て来た為です。

安田さんは、前々から、古今集の分類研究に興味を持つてゐられましたが、かうして出て見ると、内外相伴つて、みのある議論になりました。極僅かな注意洩れを拾つて、嬉しく讀まして頂いた実証を見せませう。

あたらしき年のはじめに、か

くしこそ 千年をかねて た  
のしきをへめ

「たのしき完へめ」が、「…を積み」になつた文字の上の径路や、後世の御薪ミカマキ

式が、早くから詔旨の下つた後の宣り直ひの儀の際に行はれた為、大直日の奏歌が、朝賀の後に行はれた事などが、注意せられたかと思ひます。

「とりもの」の説明が、稍不足で、此だけでは、神遊の本義知りかねます。評釈以前の古今註と違はねばならぬ処は、かふいふ点にあつてよいと存じます。

ひるめの歌を、天照大神の歌と簡評したのは、不賛成です。朝神あげの歌なので、其が、ひるめが大日靈女神に固定してからの解釈で、朝に「十三字分空欄」「いづこにか駒はつながむ朝ひこの…」などを見てもわかりませう。

末の松山 波もこえなむ

此越えなむは、越えてくれなのです。私の心に偽りは無い。もし此うけひが正しくなければ、高いこの海山の山を、浪よ、こえて見せてくれ」といふのです。

きみがみかげに…

此は恋歌です。さうして其が東の風俗として、東女の誠実を示す歌に転用せられ

たかも知れませぬ。筑波山のどの側にも、神事ミカサ蔓草はあるが、あなたの御姿ミカタを越すかげはない。

かひがねは、富士山でせう。

かたえさしおほひは、巨樹伝説から出た民謡の国ぶり化したもので、片枝だけで、麻生の浦全体を翳し掩うてあて一□になる□のあつたという伝説があつて、なりもならずもを起こしたのでせう。もつと溯れば、かうした木の根の元で寝た記憶があつたのでせう。はじめてのかたらひは、住ひつく事とは別なのですから。

「あふなあふな」「そへにとて」「あまびこ」などいふ語は、却て古今伝授の語よりも、むつかしい。さうして、広く影響がある。こんな点において、更に思ひを深めて頂きたかつた。

私は、どうしても古典の研究は、一字一句の訓詁から、正式に出発せねば嘘だと思つてゐる。此本の成口<sup>ナカ</sup>に比べては恥しいが、私も万葉集にこれを試みた。だから、御両人の事業の意義を、誰よりも深く感じ、誰よりも激しく喜ぶ。実は、國學院大

學出の人々は、一応古典を、かうして口訳してふ縁義務があるのではないかと  
思ふ。私も久しい悔いの為に、万葉の口訳をし直さうと考へてゐる。此本のお二人  
も、やがてさうした時期に逢着せられるかも知れぬ。その時になれば、私の苦言が、  
或は意味を生じて来るでもあらうと思ふ。(5)

この紹介文からは、この原稿が書かれたと思しき昭和四年から遡ることほぼ十三  
年前、折口が最初の著作として『口訳万葉集』を始めて世に問うたときからの、彼  
の口訳あるいは注釈というものに対する一つの姿勢を読み取ることが出来るだろ  
う。

列挙すると、

(一) 訓詁注釈からの出発

(二) 流布本主義

(三) 短歌史を前提とした歌人・作品の解説評価

(一) については、

古典の研究は、一字一句の訓詁から、正式に出発せねばならない。

という部分に表れている。折口の万葉を含む古典の読解は、しばしば天才的文学者  
としてのひらめきの如く言われるが、しかし決してそんなことはない。折口は語の  
成り立ちから一字一句解剖していき、その結果全体を読み解く。その上で正しい読  
みを提示してくるのである。ここで「正しい」というのは研究において正しいとい  
うことではなく、作者にとつて「正しい」ということなのである。それをいかに蘇  
らせるか、それこそが折口の営為だった。

次に(二)については次の部分に披瀝されている。

流布本主義―久しい間の学問の根底を作つて来た―をおしとほして。どこまで  
正しいものを得、どこからやむを得ず異本を利用すべきかと言ふ正しい努力が  
払はれてゐる。

折口が『口訳万葉集』の口訳を進めるうえで流布本を使用していたことは周知だ  
が、それ以外の著作、あるいは講義などでも彼はほとんど流布本を使用している。  
いわば流布本主義と言つていい。その理由の一端がここに披瀝されている。

流布本が「学問の根柢を作つてきた」という考えは、即ち研究史あるいは注釈史  
レベルにおいても、「歌を読む」と言うことが研究の本質であつて、そのためには

流布本が最も正当なテキストであることを標榜しているのである。異本はあくまで  
も正しい読みの傍証に過ぎない。仮に、新たなテキストが見出されたとしても、そ  
れは読みの本質を大きく変えるものではない。そのことよつてのみかつての読み  
を大幅に変えようとする姿勢に折口は批判的であつたことがうかがえる。「どう読  
むか」ということに絶対の価値基準を置き、そこで歌や歌人と対峙することが解釈  
の最大の姿勢であつてみれば、新しい発見などというのは「どこまでやむを得ず異  
本を利用すべきか」ということだけのことなのだ。

流布本は、まさに先人が読み継いできた本であること、それに依拠することは先  
人の読みといかに対峙するかということである。時代における読みの「正しさ」は、  
同じテキストをもつて比較せねばならない。まさに折口の読みの真髓である。

次いで評価しているのは、「作者別配列」を採つたという点である。これは大正  
十一年に土岐善麿が「作者別万葉集」と続刊の「作者別万葉以後」で採用した方法  
である。(6) 折口は池田の採つた方法を、その流れを「大胆にして下さつた」と高  
く評価する。

土岐のこのふたつの作物は、折口の短歌史の発想に大きな影響を与えたことはい  
うまでもない。

例えば「作者別万葉集」については

私は土岐さんに対して、慶賀と感謝とを、心の中で同時に感じた。土岐さんの  
為事の意味深かつたことを覚ると共に、其努力が愛著する古典を弘通させる強  
い導きになつて居る事実を、目の前に見たのであるから。さうして、それをし  
なければならぬ私どもの懶けてゐた間に、土岐さんはちゃんとやつてくれたの  
だから。(7)

と述べるように、ほとんど手放しでその完成を喜んでゐる。大歌、読み人知らず、  
伝説歌なども含めた歌人を短歌史の流れのなかで概観できることが、読みの水準を  
いかに高めるか。偽作真作といった作者問題を考えるうえで、比較研究という立  
場から大きな貢献度をこの二つの書物は持つていた。折口が自ら「作者別万葉以後」  
の跋文として寄せた文章が、折口の最初の短歌史の代表的作品「短歌本質成立の時  
代」であつてみれば、そのことを納得することができよう。折口の短歌史構築にと  
つて「作者別万葉以後」は大きな意味を持つていたことがわかる。

ここに同じ体裁と内容をもって出版された『口訳对照古今集』に、このような祝辞を送ったのも理解できる。そして恐らく池田正俊も、「口訳万葉集」という折口の作品、そして土岐善麿の『作者別万葉集』『作者別万葉以後』という二つの作品の魂を合体させた形の書物を刊行したときに、その紹介文の執筆をだれであろう折口に依頼したのは当然だったと言えるのである。

(注)

- (1) 山下久男著、石井正巳編『雪高き閉伊の遠野の物語せよ』(平成十二年三月、遠野市立博物館)、『同補遺』(平成十二年二月、東京学芸大学言語文学第一学科古典文学第四研究室)、石井正巳編『同山下久男書誌』(同)。
- (2) 山下久男「先生の思い出」(『雪高き閉伊の遠野の物語せよ』(平成十二年三月、遠野市立博物館)所収)。
- (3) 折口信夫「山下君に寄せる手紙」(新版『折口信夫全集』第二十二卷所収) 池田正俊・安田喜代門『口訳对照古今和歌集』、昭和四年十月、中興館。
- (4) 序文は尾上八郎。安田喜代門による「古今集概説」、池田正俊による「古今集の撰述と紀貫之」の二つの論文を巻頭に載せる。折口の紹介文にもあるとおり、「歌謡」「和歌」を先頭に「読み人知らずの歌」「読み人明かな歌」と続き、それを時代順に配列している。
- (5) 国学院大学折口博士記念古代研究所蔵。全集編纂後の資料再調査の段階で筆者が発見、解読していたもの。
- (6) 土岐善麿『作者別万葉全集』(大正十一年、アルス)『作者別万葉以後』(大正十五年、アルス)いずれも、昭和六年に改造文庫から再刊された。
- (7) 折口信夫「万葉全集と私」(『日光』第一卷第九号、大正十三年十二月、新版『折口信夫全集』第三十三卷所収)。